

## 「心身相関と QOL に関する医療人類学的考察：タイ・エイズホスピス寺院における死にゆく者の笑顔の考察から」

鈴木勝己 1、伊藤康文 2、伊東純一 3、辻内琢也 1

早稲田大学人間科学学術院 1 早稲田大学大学院人間科学研究科 2 早稲田大学人間科学部 3

### 【目的】

本報告は、エイズ病者の心身の相関性と死のプロセスを質的に明らかにすることを目的としている。タイにおけるエイズ病者は、死期が近くなると医療的なケアよりも宗教的なケアが重視されるようになる。エイズは根源的な治療が困難であるため、死の質 (Quality of Death) が問われるからである。心身の相関性と死の質を明らかにすることは、結果的に病者の QOL の向上に寄与することが期待される。なお本報告は個人の特定を避けること、寺院への報告書の提出により倫理的配慮がなされている。

### 【方法】

本報告の調査データは、2007 年 2 月から 2010 年 10 月までの調査期間中に、東南アジアタイのエイズホスピス寺院において得られたものである。本研究の方法は、医療人類学の立場から参与観察法および非構造化された聴き取り調査法を採用している。この研究方法は、ホスピス寺院で暮らす人びとの生活を記述していくことにより、文化的な文脈に基づいた生と死の質的な意味を探求する分析である。

### 【結果】

エイズ病者の心身の相関性は、同病者や医療者との関係だけではなく、先に亡くなった病者や仏陀、さらには報告者との関係によって変化するものであった。たとえば本研究の参与観察法は、病者に対してマッサージなどを施療しながら自然な会話の流れのなかで行われた。すべての聴き取りは完全な自由対話形式であったため、報告者と情報提供者の関係は直接的に病者の心身に働きかけ、お互いの喜怒哀楽を共振させるものとなっていた。

### 【結論】

ホスピス寺院における病者の QOL には個性がある。寺院では、人びとが死を迎えるにあたって医療資源よりも宗教的資源を用意するが、病者一人ひとりの個性に対応できるわけではない。本報告では、病者とケア提供者の感情の共振をひとつの切り口として病者の心身の相関性と QOL の関係性について考察する。